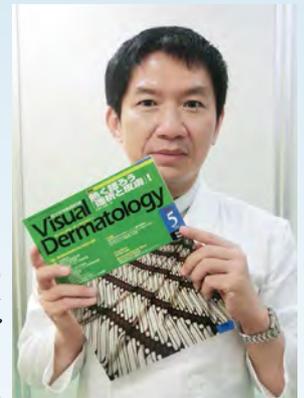




## 羅針盤

安部 正敏  
Masatoshi Abe

医療法人社団廣仁会 札幌皮膚科クリニック 院長、  
Visual Dermatology 編集委員



## 先覚者の好学，後学徒の向学

今を遡る16年前、2004年5月号の本誌特集は「熱く語ろう！「透析と皮膚」！」であった(写真)。責任編集は服部瑛先生。筆者の大学、そして同門の大先輩である。筆者がヒヨッコ皮膚科医になった時、先生はすでに開業され地域医療に多大なる貢献をされていた。先生は開業されてからも学問に厳しく、当時日本皮膚科学会群馬地方会では毎回演題を出され、論文執筆も旺盛であった。疑問があれば貪欲に学ばれる姿勢はいつも真摯で、後輩に対しても偉ぶることなく素直に質問される好学な先覚者であった。筆者が大学で乾癬外来を担当していた時、だしぬけに電話を頂き「特徴的な臨床像を呈する患者が来たが、乾癬でその様な報告はあるのか？」と問われた。瞬時の口頭試問に背筋が凍る思いであったが、僥倖にも一夜漬けで山を張った試験がドンピシャ当たったがごとく奇跡的にお答えできた。「勉強しているね～」、後日飲みみに連れて行って下さる後輩に優しい先生である。

時は今、本誌編集委員の末席を汚し、毎月の特集号を立案する立場となった。無論、浅学の徒である筆者には、読者の知的好奇心を満足させるアイデアなどあろうはずもなく、毎度編集長U氏を落胆させる日々である。しかし、いつか「透析と皮膚」の第二弾ができぬものか？との「熱い」思いがあった。先の特集は、今もまったく色褪せることなく「透析と皮膚」のバイブルとして君臨する。しかし、昨今透析は、技術の進歩はもちろん、在宅透析や透析条件設定による生命予後の改善など、皮膚科専門医が容易にアクセスできぬ情報も多い。最新知見を知ることで「さらに熱く語れる」のではないかと？16年を経て透析専門医の「皮膚」への注目が高まっている今こ

そ、その対話が重要なのではないかと？そうだ！折角だから特集のタイトルは「もっと熱く語ろう「透析と皮膚」！」として、時を経た続編にしよう！編集委員会で恐る恐る提案すると、満場一致で快諾を得て、やっとヒヨッコ編集委員はスタートラインに立てた思いである。ただ、誤算であったのは後輩である筆者が責任編集を自ら担当することになったことであるが……。

医療技術の進歩は、当然結果高齢化を生む。透析やストーマ患者に発症する皮膚病変は、それらの要因に加え、加齢による皮膚の生理学的変化を理解せねばならず、より複雑化している。当然、後者は皮膚科医がもっとも得意とするところであり、前者の知識を体系的に学ぶことがこれら領域における皮膚科医の貢献となり、ひいてはその存在意義を高めることに繋がるものであろう。愚見であるが、今後も学際領域をテーマとする特集を模索すべく、後学徒として向学に努めたいものである。

なお、目次をご覧になりお気づきかと思うが、今回執筆頂いているお二人の服部先生は服部瑛先生の後継者であり、筆者もよく知る後覚者である。医学雑誌の責務の一つに次世代への知識の継承がある。本誌が毎年フレッシュアップ特集を組むのはその表れであるが、時間を経て同じテーマを掘り下げることは、知識と技術の伝承として大いなる意義があろう。16年後、本誌で取り上げられるであろう「透析特集」を手取るのが今から楽しみだ。せいぜい、飛行機事故には遭わぬよう気を付けよう……。 (ちなみに、本号表紙は編集長の粋な計らいで筆者が大好き「電車」です！)